

ポレポレ 倶楽部 通信

発行日 2011年 8月 No.20

発行責任者 高田 次雄

久留米市安武町武島468-2

「出会いの場 ポレポレ」内

Tel 0942-27-2039

Fax 0942-27-2086

障がいがあるからこそ

祭りを楽しもう!

久留米市に夏の訪れを告げる「土曜夜市」が始まりました。「メンバーの皆さんと夜市に参加し、一緒に夏を楽しもう!」と、今夏は3週にわたりメンバーをはじめ保護者、スタッフが浴衣や甚平を着て六門商店街へ繰り出しました。

メンバーはまっすぐに歩けないほどの賑わいに驚きながらも、出店でたこ焼きを買ったり、金魚すくいを見たり、ゲームに参加したりと思う存分満喫しました。メンバーが目をキラキラと輝かせる姿を見ると、夏の熱気や季節の風情を肌で感じる機会を持って、とてもよかったですと思いました。

このように、障がいがある人もそうでない人も誰もが地域の中で祭りや行事をともに楽しめるようになると、街が輝いていくのではないのでしょうか。

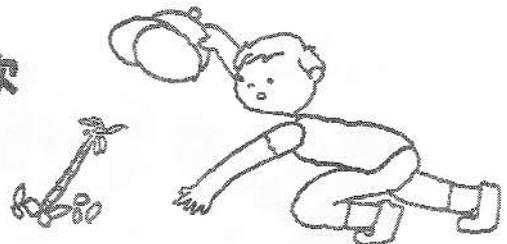


(拓く スタッフ 渡邊 智香)

目

- 2P } 東北大震災支援 ボランティア報告
- 3P }
- 4P 支援が巡回するケアホーム～「こりんずハウス」開所に向けて～
- 5P グループホーム学会に参加して～若い力が新しい未来を創る～
- 6P 「地域食堂」いいとこ 一度はお出で
- 7P ケアホームがご近所をつなぐ～ひろがり is andante (ゆっくりペースで)～
- 8P 第10回 ポレポレ祭り

次



東北大震災支援 ボランティア報告

人間らしい支援を

3月26日、東京から仙台行きのバスが出るようになって、被害のひどかった石巻に行きました。まだ、水やガスなどライフラインが止まっていました。

被災地へ行ってみて、改めてわたしたちの人権感覚がおかしいと感じました。「目の前で夫が孫をかかえたまま凍死してしまった。」「津波が押し寄せ、あらゆるところで、『助けてくれ』と、叫び声が聞こえ、2時間後にはその声が聞こえなくなった。」そんな生き地獄を味わい、低温障害や泥水腹水や極度の緊張感等で体調の思わしくない人ばかりです。

そんな人たちに、わたしたちはよかれと思って支援物資を送ってしまったのです。

被災地以外のわたしたちは、贅沢にいろいろなものを食べているのに、被災者は、おにぎりや賞味期限ぎりぎりの甘い菓子パンのみを、毎日食べていました。そんな状況をテレビで見てなんとも思わない、むしろ自然な状態だと思っていたのです。

はじめから心身ともに傷ついた被災者中心に、栄養を考えた給食を提供すべきだったのではないのでしょうか。布団にしろそうです。体育館のようなところにずらっと布団がしかれて、その上で食事をする、汚い布団に汚い毛布を組み合わせていました。布団のまわりも布団の下もごみだらけです。貸布団など、清潔な布団を提供すべきだと思いました。

新聞では、被災した方たちの忍耐強さを褒め称えていましたが、「被災者だから我慢するのは当たり前」という感覚があったと思います。「障がい者は我慢するのが当たり前」という感覚と同じです。社会的弱者は、まだまだほどこしの対象なのかもしれません。

被災地に行って考えさせられることは山積みです。2週間行かせてもらったのですが、その間は被災者のことだけを考えて行動しました。社会福祉に携わる私たちの仕事の原点を取り戻したような気がします。

それで、うちの職員や他の福祉関係者に、おりにつけ被災地に行く事をすすめています。被災地に行かれない方はコーディネートしますので、拓く、馬場のところまでご連絡下さい。

(拓く スタッフ 馬場 篤子)

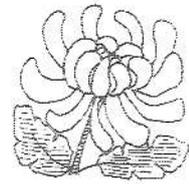


水・ガスのない中、全国から集まったボランティア



送った自転車に乗る子どもたち

心を寄せ続けたい



95年阪神大震災の時は物資を持って行きました。新潟の地震、スマトラの津波に驚き、四川大震災では新聞の「ペンを握りしめたまま亡くなった生徒の写真」に涙し……。地震だけではなく、原発、お腹いっぱい食べられない子どもたち……。色々起きていますが、他人事で何も変わらない自分がいました。今、同じ日本の半分が大きな災害にみまわれ、この先どうなるのか不安がいっぱいです。今回のボランティアの経験で身にしみたことは、人間は「生きている」のではなく「生かされている」ということでした。津波を知らせるために最後まで放送をした人、他人を助けようとして亡くなった人。子どもが、友達の死を悼み「僕、生きなければよかった」と言ったこと。「負けちゃなんねー」と海水を飲んでも必死につかんだ枝を離さなかったおばあさん。様々な声を聴き、何も無くなった景色をみて、これからどう生きていくのか……。そして、日本の痛みとして留め置き、被災地の方が元気になるまで心を寄せ続けたいと思います。

(拓く スタッフ うえむら 千尋)



自分ができる事を行動に踏み出していきたい

テレビで報道される震災の光景を呆然と見入っていた1週間。それから4ヶ月近く経って、震災関連のニュースも特別枠はなくなりました。何か収束に向かっているのか…そんな気配すら感じていた時、ボランティアに行くことになりました。

正直、自分に何が出来るのか？不安と疑問を持ちつつ向かった現地では、報道で伝わらない多くの現状を目の当たりにしました。刻一刻と変わる避難所の状況。支援が必要とされるニーズに追いついていない、善意で集められた支援も活かされずにいる。それもすべて、実際に見なければ分からない事でした。

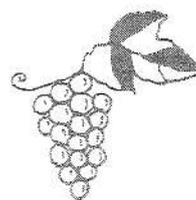
ボランティア期間の中で最も印象に残ったのは、現地の方に見せていただいた雄勝や女川の光景でした。外部の人間である私たちに、故郷や、そこでの苦しい体験を教えていただいた事への感謝の気持ちとともに、その体験は今でも胸の中に響いています。

よく東北の方は苦難を耐える強さがあると聞きます。しかし派遣後の今では、その言葉に支援者自身が甘んじている様な気がしてなりません。『私たちは物のように扱われているんですよ…すべてを流されて今度は仮設に押しやられるんです』避難所の方にこう話していただいたとき、多くの方の切実な思いを聞いたようでした。どうすればこの先被災した方が、生活を取り戻せるのか…大きな課題を受けて1週間のボランティアを終えました。

現在、避難所で暮らす子どもたちに自転車を送る取り組みをしています。先ずは自分の出来る事を行動に踏み出していきたい。そして、その原動力を与えてくれたのはやはり避難所やボランティアで出会った皆さんだったのだと思います。

(拓く スタッフ 浦川 陽子)

「こりんずハウス」開所に向けて



今年2月、私がこの事業を始めようと思ったのは、社会福祉法人「拓く」常務理事の馬場さんとのやり取りがキッカケでした。2人で正月に冷凍していたお餅に、たっぷりの博多ねぎと黒豚をのせこんがり焼いて、ささやかな昼食として食べていた時でした。「ちょっと、由子さん、ケアホームをせん?」。突然のことでしたが、「そうやね、それもいいかも」と即座に答えていました。

馬場さんは問屋街の活性化も兼ねて、この地域で、支援が循環する街、人と人の関係を作りたいと語りました。私も、支援や介護が必要になった夫の母(83)と実家の母(85)の2人を抱えていますし、母たちが直面している問題は、もうじき、いやもしかしたら明日にでも、自分自身のことになっていくだろうと感じていました。誰かが一方的に世話をするというのではなく、互いが支えあっていける関係「支援の循環」を作ることが大事なことだと考えていました。気楽な昼食の席でのついでの話だったのですが、その後話し合いを繰り返す中で、中央町「こりんずハウス」の話がまとまり、形になろうとしています。

私には、環境・福祉はじめ、社会との繋がりを共に考えて行動してきた仲間がいます。人はひとりで生きていけるわけではない。繋がりの中で社会全体の利益を考えて生きていこう! こんなに言うのは面映いのですが、常に志は高く…と考えてきた仲間たちです。この仲間が今、ヘルパー2級の取得に向けて研修中です。

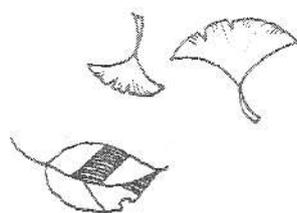
施設の名前の由来も、私[ゆうこりん]の思い立ちということと、少々困難があってもあきらめない、へこたれない懲りない面々で「こりんず」と命名しました。

「こりんずハウス」は、我が家を改装し、家族と障がいのある方と共に暮らすケアホームです。これは「拓く」のケアホームとしては初めてのことだそうです。私たちは、『ケアホームはかくあるべし』など知らないままにスタートを切ります。今から、ここから、こんな私たちだからこそできる関わりを考えていきたいと思っています。

これから末永く、お付き合いいただきますよう、お願いいたします。



(こりんずハウス世話人代表 今村 由子)



グループホーム学会に参加して

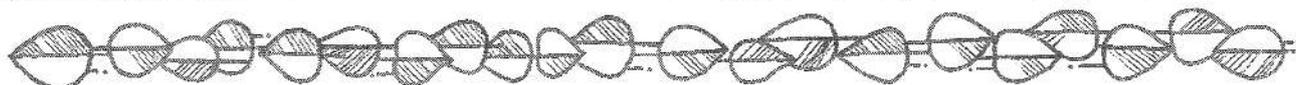
若い力が 新しい未来を作る

「誰もが地域の中で豊かに暮らしていくこと」を目指し、1989年にグループホーム制度が導入されて約20年。障害者自立支援法制定以降、さまざまな役割が求められる中で原点に立ち返り、グループホームとは何かを改めて考える「日本グループホーム学会大会 岡山大会（障がいのある人と援助者でつくる日本グループホーム学会主催）」が6月18・19日、岡山市内で開かれました。社会福祉法人 拓くからも、就職1年目の末次明日香さんと同2年目の児玉元気さんが参加しました。来年は震災被災地の岩手で開催され、2年後にはこの若い2人が中心となって久留米大会を盛り上げていくことになりました。

1日目に開かれた3人の方による対談、「地域生活と23年目のグループホーム」では、登壇者のひとり、自立生活センターメインストリーム協会の玉木幸則さんから、今回の東北大震災後、精神障がいのある方からたくさんのお便りがくるとの報告がありました。その中でも、玉木さんの心をひどく痛めたのが「薬を飲んで、余命短いであろう私が生き残っていていいのか」というものだったそうです。玉木さんは「誰でもいつどうなるかわからないのは、障がいの有無には関係ない。みんなそれぞれ一生懸命生きている。」と強く訴えられました。2日目にはメンバー交流会に参加し、グループホームでもっと自分の想いのままに自由に暮らしたいという希望が、多くあることを知りました。

私はこの大会に参加し、絶対的なものは一つもないことを感じました。もっと一瞬一瞬を大切にしながら、訴えがないから問題がないと考えるのではなく、その裏にある想いを汲み取れるようにアンテナを広げていきたいと思いました。

（拓く スタッフ 末次 明日香）



2日目に開かれた会議では、グループホームで生活するメンバーの方が、皆の前でステージに立って、普段スタッフや家族に言えないことなどを話されました。私はそこで、グループホームでの食事のことやスタッフにもっとこうして欲しいなど、メンバーの率直な思いをたくさん聴くことができました。そして自分は本当に皆様の思いや声などを聴いているのだろうか？チェムチェムに活かす事ができているのか？と強く考えさせられました。

現在、ボレボレでは利用者の方と面談を行っています。その中で利用者の方の声を聴き、今後のチェムチェムでの活動に活かしていきたいと考えております。

（拓く スタッフ 児玉 元気）

地域食堂 いとこ 一度はお出で

三原さん家（ケアホーム）で、「地域食堂」が始まってから 1 年余が経ちました。少子高齢化が加速するなか、この安武町でもひとり暮らしで、いつも孤独な気持ちで食事をしている高齢者や、家族が働きに出る日中にひとりで子育てに追われ、次第に孤立感を強めていく若いお母さんが増えてきました。「地域食堂」はそうした方々と「食」を通してつながろう、絆を深めていこうという思いで、昨年夏から始めました。

食事を作るのは地域の人たちです。当初は週 1 回でしたが、今年 4 月からは、ポレポレ倶楽部や法人「拓く」が作り手として参加するようになり、火・金曜日の週 2 回開くことになりました。決してレストランのような豪華なメニューではありませんが、地元産の新鮮な野菜をふんだんに使った栄養満点の「家庭の味」と、「我が家」のようにほっとくつろげるあたたかい雰囲気の人気を集めています。

今は月に 1 回運営委員会を開き、地域に根付いていくために話し合いを続けています。日替わりで担当団体を決め、3 者がそれぞれ食べたり作ったりと、入れ替わる仕組みを通して「おもてなしの心」を学んだり、限られた予算の中でよりおいしいメニューを考案しようと試行錯誤したりしています。私も実際に食事を作りました。まずは何から始めればいいのか分からずにいましたが、メインスタッフに教えてもらいながら、ニラ玉 40 人分の調理に大奮闘。初めての経験でしたが、人に食べてもらう幸せ、「おいしい」といってもらえる喜びを体験させてもらいました。

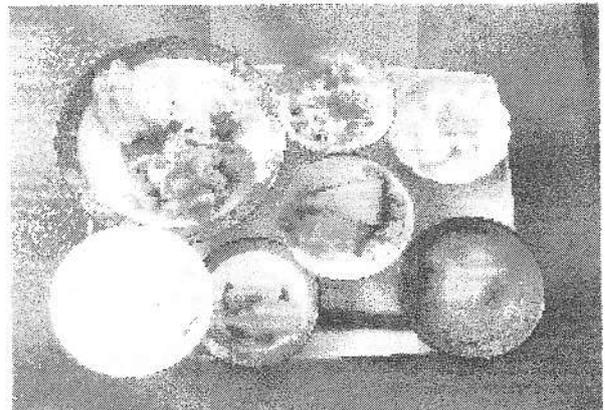
最初はひとりでも、隣り合わせで座った瞬間から仲間です。地域食堂に来られる方々は、おいしい昼食を囲んでおしゃべりに花を咲かせ、思い思いに交流を深めています。みなさんが心身ともに満たされ、とびきりの笑顔で帰って行かれる様子を見ると、私たち「もてなす側」もとても幸せな気持ちになります。

今後は、ひとり暮らしの高齢者はもちろん、子育て中の若いお母さんたち、さらには夏休みなどに、共働きの家庭の子供たちにも気軽に来てもらえるようにチラシを作って、積極的に情報を発信していきたいと思っています。「地域食堂」がさらに多くの人に愛され、世代を超えた地域の交流拠点となるように頑張っていきたいです。

(拓く スタッフ 前田 力哉)



三原さん家



ある日の献立

出合いの場ポレポレ 10周年記念

第10回ポレポレ祭り 2011

テーマ「絆^{きずな}をひろめよう」

～東日本の人ともつながろう～

10年前、障がい者の親と教師との強い絆で「出合いの場ポレポレ」ができました。地域の方と絆を深めてポレポレ祭りがはじまり、今では活気溢れる大きなお祭りになりました。今年のお祭りで、いろんな人(東北の方も参加します)に出会い、話しかけ、絆をひろめてみませんか？

なお、今回の祭りの収益は、東日本大震災の復興支援金等にさせていただきます。

2011年 10月23日(日)

出合いの場ポレポレにて

午前10:00～午後3:00



ポレポレ祭りの開催にあたり
次のようなご協力をお願いいたします

●協賛のお願い
チラシに会社名・個人名を掲載します。
(一口 2000円)

●ガレージセール用品のお願い
ご家蔵にあるガレージセール用品を提供して下さい。未使用のものをお譲りします。

●広告のお願い
パンフレットに会社名・個人名を掲載します。
(一口 5000円から)

●ボランティアのお願い
・祭り実行委員会への参加
・当日販売のお手伝い
・手芸品など手作り品の提供

お申し込み先
〒830-0071 久留米市安武町武島 468-2
TEL: 0942-27-2039
FAX: 0942-27-2086
E-mail: h-polepole@ktam.or.jp

＊前回の収益金＊

1,700,260円

【使途】

安武小学校

大善寺小学校

筑邦西中学校

安武コミュニティセンター

大善寺コミュニティセンター

ミニミニ子ども祭り

活動費として

東日本大震災支援金

連絡先 ポレポレ祭り実行委員会 委員長 野上真紀子
(出合いの場ポレポレ内)

住所 〒830-0071 久留米市安武町武島 468-2

TEL: 0942-27-2039

FAX: 0942-27-2086

E-mail h-polepole@ktam.or.jp